

が、約十日後、下痢、出血、高熱等の原爆症状で倒れ、妹達がその遺骨を持って郷里奈良へ埋葬に行く途中、立寄つたりして、段々と大学の惨状の予想外にひどいことが明かにされて行つたのでした。

その後広島へも数回、救護に行き、その悲惨に悲しみ憤り、之に対する医学の無力さを嘆き、又翌年十一月始めて大学の焼跡を踏み、殊に基礎の焼跡を独り歩いて廻り、懐しい教室跡に焼け残つて立つ、コンクリートの壁だけの建物、解剖実習室の屍体タンクだけが元のまゝで、中にはフォルマリン液に浸つたライもそのまゝにあり、実習室のコンクリート床に雨ざらし日ざらしで散らばっている頭蓋骨の、ポツクリと開いた眼窩の空ろさを見た時、更めて、此の人類の悲劇は、もう広島と長崎だけで沢山だ、決して二度と繰返さる可きで無いことを、原子野で独り袖々に折つたことを忘れることは出来ません。

## 調外科学教室

教室員も次々と応召し、当時は調来助教授、木戸利一助教授、佐藤克巳学部卒業生、日高健博医専卒業生、台湾人呉氏、研究補助員の溝田輝雄、青木カズエの両氏、技術雇の金子マサ子氏、それに村山タミエ看護長以下二十一名の看護婦が勤務中であつた。

### 被爆時の状況

調教授は教室（現在放射線科二階の一室）木戸助教授と日高先生は数人の看護婦と地下室で繃帯交換中、佐藤先生と三人の看護婦は外来診察室、溝田研究補助員は研究室、村山看護長は病棟二階、他の教室員は病棟及び医局で夫々被爆す。

尙台湾人呉氏と二川看護婦は長崎市外に居て被爆を免る。

爆死者は研究室の溝田研究補助員とギブス室（現在外科手術室）に居た河田ヒサエ看護婦の二人である。

教室員は裏山に避難し一夜を明かす。

十二日調外科を主体とする救護班を組織し道の尾の滑石大神宮拜殿と岩屋クラブで角尾学長、山根教授その他教室員、学生、看護婦等の治療と看護に当る。尙此の救護班は十八日に解散し、参加した学生、看護婦達は夫々帰省した。

死亡者の官職並びに氏名

官 職	氏 名
研究員	溝 田 輝 雄
補助員	
看護学校	河 田 ヒ サ エ
二年	

## 原爆当時の調外科追想

調 来 助

戦争が愈々酷となった昭和二十年八月、以前は二十人近くいた教室員も次々に応召して、当時残っていたものは附属医学専門部教授の木戸君（現在田川市立病院長）と、医学部仮卒業の佐藤克己君（現在南高有馬村開業）、専門部仮卒業の日高君（現在鹿児島種子島開業）、台湾人某君（終戦直後に帰国）の四人に過ぎなかった。看護婦は村山婦長（現在諫早分院総婦長）を初め、佐藤、木田、本田、阿部、酒井、二川、笹山、田中、矢口、出口の諸君と生徒数人がいたが、その外は研究室に補助員の溝田君が勤めていただけで、以上の約二十人が調外科に勤務中の職員全部であった。

入院患者は八月一日爆撃のあと大半退院したので、極く少数しか残っていないが、それでも未だ東病棟（現在放射線科教室）及び西病棟（現在外科病棟東側半分）に数人宛、そのほか外科病棟地下室にも重症

患者数人を收容していたので、我々は空襲警報が出ても待避することが出来ず、全員院内に頑張つて仕事に従事していた。看護婦諸君は大分不満のようであつたが、この事が却つてよい結果を齎らしたようにも思われる。

原爆の落ちた八月九日午前十一時二分には、私は教授室（現在放射線科二階の一室、村山婦長は東病棟二階の廊下、木戸君、日高君及び看護婦数人は地下室で繃帯交換中、佐藤君と佐藤、阿部、出口の諸嬢は外来診察室（現在解剖学教室南側の部屋）で外来患者の治療に従事し、台湾人某と二川嬢は長崎市外に居て爆撃を免がれたので、結局原爆の犠牲となつたのは、研究室に居た溝田君と、偶々ギブス室（現在外科手術室）で仿っていた看護婦生徒の二人だけであつた。

其後我々は調外科を主体とする救護班を組織し、滑石町の片岡町内会長に交渉して滑石大神宮拜殿と岩屋クラブを借り受け、大神宮には角尾学長と山根教授、岩屋クラブには教室員、看護婦、学生たちの負傷者約三十人を收容して、連日治療を行うと同時に、町内の民家に担ぎ込まれた数百人の負傷者達も手を分けて往診治療した。其時集つたものは木戸君と木田、本田、阿部、酒井、二川、笹山、矢口、田中、出口の看護婦諸君、其他専門部三年生六七人で、私の疎開先四尺秀治氏宅に寄宿しながら診療を開始したのが八月十二日、それから米軍上陸騒ぎの初まつた十八日まで約一週間、焼けつく炎熱の中を右往左往して患者達を治療して廻つた。今から考えるとあれでよく体が続いたことと思う。

十八日には看護婦諸君が米軍の上陸を恐れて帰宅を申出たので、残念ながら岩屋救護所の閉鎖を決意し、生残りの患者を時津、諫早、其他へ

転送した後看護婦諸君を帰宅させ、手伝つて呉れた学生諸君とは、同日夜、村中逃避して誰一人残っていない四尺家で訣れの杯を酌んだ。但し木戸君と学生二人（上野、片山両君）は二十二日角尾教授が逝去され、二十三日告別式がすむまで私の所にいて、二十四日にそれ／＼郷里に引上げたので、それまでは何とか気がまぎれてよかつたが、其後は急に淋しくなり、原爆で死んだ二人の男の子のことが思い出されて仕方がなかつた。

木戸君や私が原子病にかかつたのは九月初めからで、二人とも幸に生命を全うすることが出来たが、村山婦長が丸坊主となり全身が衰弱して殆んど死にかかつていと云う報告を聞いたのも丁度其頃で、一時は駄目ではないかと危ぶまれたが、今日のように元気を回復したのは全く奇蹟と云つて差支ないであろう。

終戦後名残を惜んで訣れを告げた教室の人たちとは、其後全部再会することが出来た。現在教室に残っている人は一人もないが、看護婦諸君の中には芽出度く結婚された方も沢山あり、一、二健康を害された方も調外科に入院して、今では完全に癒られたようである。原爆後遺症の云々される今日、どうか被爆された諸君が末永く元気で幸福に過されるよう祈つて止まない。

## 産婦人科学教室

当時の教室員としては、内藤勝利教授の下に本多有隣講師、林忠実、草場正蔵、菊池秀夫助手、伊藤茂副手、田中益雄、沖洲吉博、王文其氏（昭和二十年医学部卒業）等が研究並びに診療に當つていた。

雇として片山幸子、田川芳枝、明田沙代子、岩永敏子の諸氏、技術雇として小笹トミエ氏、看護婦として田中米子看護長以下四十四名が勤務していた。尙八月一日の空襲により手術室、部長室、図書室に被害をうけたので入院患者のうち退院可能の者は退院させていた。

### 被爆時の状況

内藤教授は草場助手及び林先生と共に病棟一階廊下で焼残りの図書文献の整理中に、本多講師、王先生は新患診察室に於て、菊池助手は旧患外来診察室で、沖洲、田中両先生は二階の入院患者治療中に被爆す。

行方不明であつた内藤教授の遺体は数日後病棟一階の熱気室で発見された。

又菊池助手は医局で、青木先生は一階廊下で、田中婦長は階上エレベータ横で、園田看護婦は二階看護婦室で夫々遺体として発見された。

尙草場助手、田中、沖洲先生は重傷を受けた。